

特 集

つくられる地域,こわされる地域

歴史の実体と認識の枠組み

編集にあたって

私は、岩波講座『世界歴史』第一巻に、「地域区分論——つくられる地域,こわされる地域」という小論を書いたことがあり(1998年),その中で以下のような議論を展開した。歴史学において、通常、地域は研究する対象を示す概念とみなされてきたが、日本の戦後の歴史学には、地域という概念を、このような自明の枠組みとしてではなく、歴史を認識するためにたえず更新され、組み替えられていく可変的なものとみなす、つまりは地域を「歴史学の方法」として考えていこうとする流れが存在した。特定の地域区分を超歴史的で自明な議論の出発点とはせず、地域という概念を、基本的には、歴史家の課題意識に応じて設定される、可変的で多様な性格を有するものとする考えは、日本の歴史学においては、かなりの程度共有された認識といってよいだろう。つまり、歴史学にとっては、地域は不断に「つくられ」、また「こわされ」るべきものということである。

では、地域はいかに「つくられ」、また「こわされ」てきたのか。これが、今回の「つくられる地域,こわされる地域」という特集の基本的な問題設定である。「つくられる地域,こわされる地域」といった時に、次元の異なる二つの層がある。ひとつは、歴史の実体という層であり、いまひとつは歴史の認識の枠組みという層である。

水島司氏の「南アジア・地域ネットワークのゆくえ」は、実体という層で、ネットワークという観点から、18世紀以降今日にいたる長い歴史的スパンで南アジアの問題を取り上げた論考である。水島氏は、植民地支配以前の南アジアにおいて、在地社会に「領域性においては閉鎖的であるが、関係性において開放的なネットワーク」が存在したことを指摘し、このような地域社会の開放的なネットワークが、グローバリゼーションの波が押し寄せる今日、いかに再生可能なのかを問うている。

川島真氏の「外交と地域 東アジア外交史からの「地域」像」は、国家や権力が創出する「地域」として、20世紀前半の東アジアで外交が作り上げる地域の問題を検討したものであり、具体的には、「支那」という呼称をめぐる中日交渉、新疆と広東を事例とした地域的重層性と外交との関わりが取り上げられている。この川島論文は、いわば地域という

視点を取り込んだ外交史の可能性を追求したものであり、地域という問題の実体と認識の双方を結ぶ領域を扱った議論といえるだろう。

古田元夫の「ベトナムと東南アジア」は、ベトナムが、いつからどのような理由で自らを東南アジアという地域世界の中に定位するようになったのかに関して、古田が従来展開してきた議論を紹介したうえで、それに対する現在のベトナムの研究者の反応を紹介して、問題となる点を整理したものである。つまりは、今日のベトナムがつくりあげつつある「東南アジア」という地域性に関する、日本のベトナム研究者とベトナムの研究者との間の対話の記録である。これは、現代の国家の営みが創造しつつある地域性が、歴史認識にどのような問題を投げかけているのかを検討したものといえよう。

富永智津子氏の「歴史認識の枠組としてのアフリカ地域 世界史との接点を探る」は、表題のとおり、歴史認識の枠組みとしての地域の問題を正面から扱った論考である。ここでは、日本での世界史の記述や歴史教育において、アフリカが地域世界として十分な扱いをされないのは何故かという問いを立て、アフリカ大陸をひとつの歴史の実体として考えようとする試みとしてユネスコ編『アフリカの歴史』（1981年～93年）などを紹介したうえで、実は、「アフリカ世界」を世界史にきちんと位置づけようとするならば、世界史像そのものに「コペルニクス的転換」が必要であることを提唱し、そのような転換の障害として世界史教科書が提示している世界史像の問題も検討したものである。

特集を担当した私が、それぞれの筆者の方に、「つくられる地域、こわされる地域」というタイトルでまず思いつく問題を自由に議論してほしいという依頼をしたために、特集としては問題が拡散しすぎてしまったかもしれないが、その中に、「つくられる地域、こわされる地域」の問題の広がりや反映されていることは確かであろう。なお、富永論文に指摘されている問題であるが、本特集でもできれば高校世界史教科書における「歴史世界」の設定のあり方を取り上げたかったが、独自の論文を企画することはできなかった。この問題については、鳥越泰彦氏が「戦後世界史意識の変遷——高校世界史教科書の分析から」（青山学院大学教育学会紀要『教育研究』第44号、2000年、33-45）と題する優れた論考を發表しているの、本特集とあわせて参照していただければ幸いである。

（東京大学大学院総合文化研究科教授 古田元夫）